筆談の花は咲いたけれども

五月六日（木）午後六時。

夕暮れ間近い南京長途汽車站、售票処前階段に腰を下ろして、まずは煙草を一服。

僕と同じようにして階段に座り込んでいる中国人たちにとって今日という一日がどのような味わいのものだったのか、僕には分からない。

今日という一日を待ちくたびれたのか。生活にくたびれているのか。行くあてがないのか。帰る所がないのか。退屈しているのか。あるいは安堵しているのか。それとも必死に座っているのか。なんとなくまた夕暮れを迎えてしまったのか。希望は陰ってしまったのか。希望はずっと危険だったのか。食べていくことが唯一の問題だったのか。問題など、立ち上がったこともなかったのか。雪崩落ちるように時代が変わっていくのを、今まさに目撃しつつあるのか。それとも、何も変わりはしないことをあなたはすでに知っているとでもいうのだろうか。

とにもかくにも、今日という一日はすでに夕暮れて、微かによどんだような空気が、疲労の色も交えて、あたりには立ちこめているのだった。

南京の市街地図を抱えたおばさんたちが、行き交う人々にためらいがちな声をかけていた。安宿のプレートを掲げて、客引きたちもあてもなく行ったり来たりしているようだった。建物の壁に凭れてぼんやりと、何を待つともなくただ待っているような男たち。

ひとりの地図売りから七角の市街地図を買い、僕は南京大学を捜していた。そこの留学生宿舎は南京で唯一の外国人が泊まれる安宿なのだった。バス路線の表示を主にした地図は見にくくて、何の予備知識もなく、なかなか大学の場所が見つからない。

「どこへ行くの」

いつ近づいてきたのか、中学生くらいの年格好の男の子が覗き込む。

「南京大学はどこにある？」

僕は地図を差し出しながら少年に尋ねた。

「どこから来たの」

「日本」

日本人と聞いて、少年は少し驚いたようだった。

「飯店へ行くのか」

「ごはんは食べたのか」

少年はしきりに繰り返す。

僕が理解できたのは少年の言葉の半分にも満たない。

もしかしたら宿の客引きなのかな、と僕は思う。

南京大学の場所も分からないようなので、立ち上がろうとすると、
「ごはんを食べてから、南京大学へ行きなさい」
少年は繰り返し、僕を離そうとはしない。
「こっちだ、こっちだ」
と僕を連れていこうとする。
そう言えば腹も減っていた、と僕は思い当たる。とりあえず腹ごしらえをすませてから、南京大学を捜そうか。
通りを渡り、ロータリー沿いに歩いて、少年が連れていったのは高架道路のガード下の小さな食堂だった。
店に足を踏み入れると、開口一番、
「この人は日本人だぞ」
と、主人らしき女性に紹介した。
四つぐらいしかないテーブルのひとつに腰を下ろして、メニューとにらめっこをしている間も、少年は得意そうに、主人らしき女性や働いている女の子たち（誰もが中学生くらいの年格好だった）に、リーペンレン（日本人）がどうとかこうとか、ナンチンターシエ（南京大学）がどうとかこうとか繰り返すのだった。
注文をすませて、料理を待っていると、お茶を入れながら、女主人が話しかけてきた。何を聞かれているのかよく分からないので、
「プートン（分かりません）」
と答えると、女主人は紙とボールペンとを取り出して、熱心に筆談を始めたのだった。
それによると彼女の弟は北京で日本語のガイドをしているということだった。
『你座火車到北京就五一元』「北京へ行きますか」
「いや、ここから次は武漢へ行くつもりです」
『你座汽車到武漢六四・五元（武漢までバスで六四・五元です）』
「バスではなくて、船で行きます」
『汽車、下午二点半—第二天早上六点　時間短（バスなら午後二時半発で、次の日の朝六時に着きます）』
『輪船要両天（船だと二日もかかります）』
それでも長江をさかのぼって行きたいのだ、ということを僕は表現できない。
「南京大学へ行きたいのだけれども…」
『你怎么想起来要到南京大学（何故ですか）』
『我想住南京大学留学生宿舎』
「留学生宿舎は安いからです」

「いくらぐらいですか」
「五〇元くらいかな」
それを聞くと、女主人は
「もっと安い宿はいくらでもある」
と言う。
「私が連れていってあげよう」
「…たぶん日本人は泊まれません」
「泊まれるか泊まれないか、聞いてきてあげるよ」
と言い残して、彼女は食堂を出ていった。
いつのまにか日はとっぷりと暮れていた。
二人のやり取りを興味ありそうに見ていた店員たちも食事の時間になったらしい、食事の支度を始めた。大きなお皿に野菜の炒めものと洗面器のような器のスープ。中学生くらいの年格好に見える少女たちがテーブルを囲んで食事を始めた。
やがて「残念…」という顔をして彼女は戻って来た。
『你座三五路汽車到鼓楼下車（三五路のバスで鼓楼まで行って）』
『再問人到南京大学怎〇走（そこで道を専ねなさい）』
『中央門―許府巷―公文総公司―鼓楼　四站』
『我帯你到三五路車站去』
「南京には何日滞在しますか」
「二日」
『請明天早上座南京一日游車一九―二〇元』
観光バスは蘇州でこりたけれども…。
「あなたは何才ですか」
「三七才です」
「あら、私は三五才。一九五八年生まれ」
「南京はいかがですか」
「とてもいいところです。たぶん」

女主人に教えられた停留所でしばらく待っていると、三五路のバスが来た。
すでに夜の九時前だった。
二両連結のバスは空いていて、ひっそりとした車内の黄色い明かりの下で、僕は地図と暗い街並とを交互に眺めていた。
四つ目の鼓楼（クーロウ）というバス停で降りて、人通りのない脇道を入っていく。しばらく歩いていくと、学生寮らしい建物が目に入ってきたが、どこで尋ねたらいいのか分からない。ともかく正門の方へ行ってみよ

うと思って、大学の敷地をぐるっとひとまわり。
正門のある通りへ出ると、大学街のざわめきが漂ってきた。何と言ったらいいだろうか。大学祭の前夜祭の雰囲気とでも言えばいいだろうか。中国の大学は全寮制なので、この時間になっても正門通りには学生たちの賑わいがとだえないのだった。通りには学生たち相手の屋台も明かりを投げかけていた。
正門脇の守衛室で宿舎を尋ねる。
「我是从日本来的」
「留学生宿舎在哪儿？」
守衛の人は心得たように場所を教えてくれた。簡単な地図を書きながら、僕には聞き取れない中国語で。
「謝々」と言い残して、正門通りを端まで行き、右へ折れ、すぐに左へ折れ、言われた通りに歩いていくのだけれども、人通りのない小道の両側には学生寮らしき建物がひっそりと立っているだけだ。建物の入口を入ってみたりもするのだけれども、受付らしきものはどこにもなくて、あたりはただ静まりかえっていた。
仕方ないので、もう一度正門へ戻り、もう一度尋ねると、たまたま居合わせた職員らしき人が、案内してやる、と言う。
男は今僕が行った道をたどり、少し違う小道を入っていく。
「そうか、ここで間違えたのか」
と考えながらついていくと、やがて宿直室と受付を兼ねたような建物へと入っていく。
男はそこで宿直の人と何事か話を交わしていたのだが、どうやらここではなかったらしい。首を傾げながら、何事かを僕に告げる。どうやらもう一度守衛室へ戻って聞け、と言っているらしい。
途中で男と別れて、再び守衛室へ戻ると、あきれたような顔をして、守衛の人はもう一度今度はひとつひとつ場所を確認しながら地図を書いてくれた。大筋では間違っていなかったのだけれども、どうやら僕は宿舎だからということで、近くだと思い込んでいたらしい。留学生招待所は大学敷地の外にあるようなのだった。
夜も次第に更けてきて、少し焦りながら、僕は留学生招待所を捜した。さっきうろうろとした小道をどんどん過ぎていく。途中、何かの大学施設の守衛室でもう一度尋ねて、ようやく留学生招待所にたどり着いたのだった。
留学生宿舎ということで、学生寮のような建物を想像していたのだけれども、最近建てられたらしい留学生招待所はホテルのような高層建築で、入口を入っていくと、ホテルのようなフロントがあった。

「この招待所に泊まりたいのですが」
と、フロントの若者（学生だったのかもしれない）に告げると、
「没有」
と、彼はそっけなく答えたのだった。
その瞬間の落胆ぶりが伝わったのだろうか、愕然としてフロントの前に立ちつくしていると、彼は
「南京師範大学の留学生招待所へ行ってみなさい」
と言いながら、地図を書いてくれた。
夜の街を一五分ほど歩いて、ようやく師範大学にたどり着き、そこでも何度か学生に道を尋ねて、ようやく見つけた師範大学の留学生招待所のロビーへと入っていく。重たい荷物をかついで、二時間近くもうろついたあげくのことだ。へとへとだった。
フロントでは先に着いた西洋人の女性と日本人のカップルがチェックインしようとしていた。そのやり取りを聞いていると、どうやらドミトリーはすでに満員らしい。一二〇元の部屋ならあるということだった。学生らしい日本人のカップルは一二〇元と聞いて躊躇し、他にもっと安い宿がないか、フロントの女性に電話で当ってもらっていたが、どうやらどこも満員でどうしようもないらしい。困った様子をしていた。
僕はもちろん、これから他のホテルを捜すなどという余裕はすでになかったので、一二〇元の留学生招待所にチェックインしたのだった。すでに一一時近い時間だった。